千葉県中近世城跡研究調査報告書
第 16 集

――真名城跡測量調査報告――

平成7年度

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 16 集

――真名(まんな)城跡測量調査報告――

平成 7 年度

財団法人　千葉県文化財センター

序　文

戦国の世の到来を告げた応仁の乱以降，戦国大名によって全国各地に城郭が築かれ，ときにははなばなしい合戦の舞台として歴史に登場しました。

本県においても，平安時代以来の名族である千葉氏，鎌倉公方の側近であった里見氏・真理谷武田氏などにより数多くの城郭が築かれ，現在までに1,048か所が確認されています。これらの城郭は，東国の中心勢力であった鎌倉公方や小田原北条氏の戦略的要地でもあったことから，その重要性は学界でも早くから指摘されています。

県教育委員会は，このような城郭の中でもとくに重要なものを対象にして，昭和55年度から国庫補助金を受けて測量を中心とした学術調査を行い，今後の保護・活用のための資料収集に努めてまいりました。今年度は，茂原市に所在する真名城跡について，財団法人千葉県文化財センターに委託して調査を実施しました。

真名城跡は，宇多源氏の流れを汲むとされる佐々木・三上氏の居城として知られ，東上総の中核的な城郭の一つでもあります。しかし，その興亡の歴史は，わずかな史料が残されているのみで，多くは謎につつまれており，城郭の構造についても正確な測量図は作成されておりません。

今回の調査の結果，真名城跡は，これまで考えられていた以上に広大な城域と，複雑かつ技巧的な構造を備えていたことが明らかとなるとともに，周辺の地名調査から城下の宿や家臣の屋敷の存在も推定することができました。

このたび，調査成果を報告書として刊行することになりましたが，本書が学術資料としてだけではなく，文化財の保護・活用にも広く利用されることを期待しています。

最後に，調査に当たっては，土地所有者や周辺住民の方々，文化庁，茂原市教育委員会，長柄町教育委員会など関係機関に多大なご協力をいただきました。心より感謝いたします。

平成８年３月22日

千葉県教育庁生涯学習部
文化課長　　鈴　木　道之助

凡　例

1　本書は，千葉県茂原市真名字小詰760ほかに所在する真名城跡の測量調査報告書である。

2　本事業は，千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている中近世城館跡測量調査の第４期第１年次であり，調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。

3　測量調査及び整理作業は，調査研究部長　西山太郎，千葉調査事務所所長　矢戸三男の指導のもとに，技師　豊田秀治が下記の期間に実施した。

調査・整理作業　平成７年11月１日～平成７年12月31日

4　本書の執筆は，技師　豊田秀治が行った。

5　調査から報告書の刊行に至るまで，茂原市教育委員会，長柄町教育委員会，真名自治会長道脇秀雄氏を初めとする真名地区の方々，味庄区区長米本富雄氏，上味庄区自治会長蒔田梅雄氏，下味庄区自治会長柴崎武保氏を初めとする味庄地区の方々，長柄町前町長川嶋美董氏，大妻女子大学名誉教授永井義憲氏，千葉県立上総博物館学芸員小高春雄氏の御指導，御協力を得た。

6　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

第２図　国土地理院発行　１/25,000地形図　「海士有木」「茂原」

第３図　陸軍測量部発行　１/20,000迅速図　「土気町」「大網駅」「長南駅」「茂原町」（１/25,000　に縮小）

第６～９図　長柄町　１/2,500都市計画図　「その６」

第11～13図　茂原市　１/2,500都市計画図　「13」「20」

7　周辺地形航空写真は，株式会社　日経コンサルタントによる平成７年撮影のものと，米軍による昭和22年のものを使用した。

8　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北である。

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　地理的環境……1
　2　歴史的環境……2
　3　史料にみる真名城……4

Ⅱ　城の構造……10
　1　周辺の小字……10
　2　真名城の全体……10
　3　大堀切周辺……10
　4　Ⅰ郭周辺……12
　5　Ⅱ郭周辺……12
　6　Ⅲ郭周辺……14

Ⅲ　周辺の中世的景観……19

Ⅳ　まとめ……23

報告書抄録

挿図目次

第１図　千葉県中央部地質図……(1)
第２図　真名城周辺遺跡分布図……(3)
第３図　真名城周辺迅速図……(5)
第４図　16世紀初頭主要城館分布図……(7)
第５図　真名城周辺の小字……(11)
第６図　真名城大堀切周辺概念図……(13)
第７図　真名城Ⅰ郭周辺概念図……(15)
第８図　真名城Ⅱ郭周辺概念図……(16)
第９図　真名城Ⅲ郭周辺概念図……(17)
第10図　周辺検出遺物……(18)
第11図　真名宿谷城概念図……(20)
第12図　小林城概念図……(21)
第13図　殿谷城概念図……(22)
第14図　真名城城内横穴墓分布図……(23)
第15図　松戸周辺郷名図……(24)
第16図　真名城Ⅱ郭復元想像鳥瞰図……(27)

図版目次

図版１　真名城周辺航空写真
図版２　昭和22年の真名城周辺航空写真
図版３　真名城遠景
図版４　真名城主体部
図版５　真名城施設（１）
図版６　真名城施設（２）
図版７　字堀之内の今昔
図版８　五輪塔
図版９　真名城周辺城館
図版10　真名城関連文書
図版11　上総国真名城主由来記（川嶋美薫氏蔵）

付図１　真名城地形測量図
付図２　真名城概念図

Ⅰ　はじめに

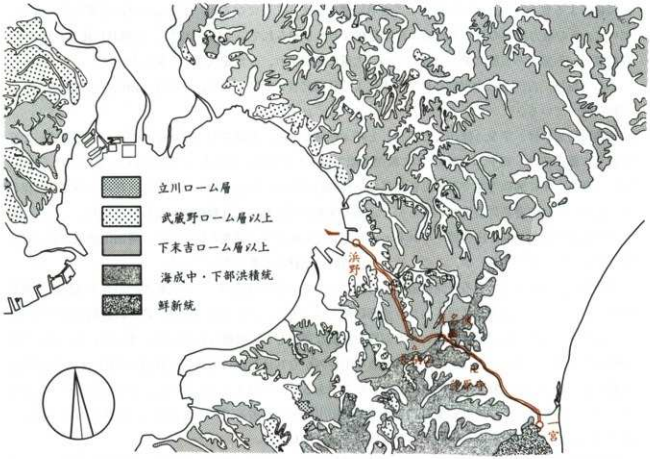
1．地理的環境（第1図）[1)]

真名城の所在する茂原市真名と長生郡長柄町味庄は，千葉県のほぼ中央，長生丘陵上に位置する。長生丘陵は，清澄山・鋸山を擁する房総丘陵の北端に位置し，その北側には下総台地が広がる。丘陵の東側は九十九里平野である[2)]。

長生丘陵の最高地は，城跡の西南約4kmに位置する権現森の標高173mで，それに連なる標高149mの高星山との間が，東京湾と，太平洋とに分かれる分水嶺である。

城跡は，九十九里平野から太平洋に注ぐ一宮川の支流豊田川に向かって南に伸びる標高約80mの舌状台地上に構築されている。豊田川は，城跡の西側から南にかけて流れ，東南方向に5kmほど，九十九里平野に出たところで一宮川の本流に合流する。この豊田川の流域は，長生丘陵周辺では比較的広い沖積低地を形成している。

長生丘陵は，その大半が笠森層と呼ばれる海成中・下部洪積層から成り，北西側の一部から市原台地にかけては，関東ローム層によって構成されている。海成中・下部洪積層は含水率が低く，関東ローム層は



第1図　千葉県中央部地質図

含水率が高い。一宮川流域は，主に笠森層の丘陵を流れており，権現森周辺などの一部がローム層の丘陵である。一宮川周辺には樹枝状の谷が複雑に入り込み，狭い沖積平地が多く見られるのは，この笠森層の開析が多いためである。ただし一宮川は，その上流が開析の少ない関東ローム層の権現森にまで到達しているため，高低差の激しい急傾斜地が東京湾側との壁となってそびえることになる[3]。

長生丘陵に接する九十九里平野は，およそ１万年前までは太平洋の海面下にあり，その後も長く湿地帯で，現在も湖沼や，湿原地が多い。この九十九里平野に面する長生丘陵は，海蝕作用により急崖をなしている。

一宮川支流である豊田川は，関東ローム層に到達する前にその水源が発生するため，分水嶺に対して比較的緩やかに移行していく。

２．歴史的環境（第２・３図）

真名城の位置する長生丘陵上には，その北西端の茂原市桂や長柄町長柄山等において，先土器時代の遺物が確認されており，古くから人々が生活していたのがわかる。その後の縄文時代においては，丘陵上はもとより，九十九里平野の沖積地微高地上にも前期以降の遺跡が確認されており，広範な人々の活動を窺うことができる。

本格的な稲作文化が導入された弥生時代になると，丘陵裾部等においても遺跡が確認されており，居住に際して，水稲耕作の対象である沖積地を，その生活領域の中に取り込んでいったことが窺える。そうした農耕による豊かな生産力を基盤として古墳時代を迎えることになるが，本地域には，古墳時代の前半において，その権力集中の証である墳丘墓の存在はあまり知られていない。ただし，古墳時代後半になると，群集墳の一形態である横穴墓が普及し始め，大量に造営され，９世紀代まで存続した。

この地域は，古代から中世にかけて中央による荘園経営の対象となり，藻原荘・田代荘・二宮荘として記録に残っている。

真名城周辺には，字を「味庄」，「庄吉」と呼ぶ地域があり，荘園であった可能性が高い。先に述べた荘園のうち藻原荘は，寛平二（890）年に興福寺領であった荘園で，茂原市の一宮川周辺と推定されている。同じく寛平二年に興福寺領であった田代荘は，長柄町の田代と推定されている。二宮荘については，保延６（1140）年に安寿院に寄進されたもので，三方支配と言われる三分割経営が行われていた。このうちの一か所が後の南北朝期に庄吉郷・小林郷として円覚寺や極楽寺に寄進されている。豊田川流域に見られる字「庄吉」及び字「小林」が，この二宮荘の庄吉郷，小林郷と推定されている。

真名城の南側を東西に走る茂原街道は，近世において房総東浜往還として茂原周辺の九十九里浜と東京湾岸の浜野，さらには海路江戸へ向かう流通経路として大いに活用されている。若干の道筋変更が行われている可能性はあるが，中世においても同様に重要な道路として活用されていたと考えられる。九十九里平野から東京湾へ向かう場合，長生丘陵の急な山並みが立ちはだかっており，豊田川の川沿いから長柄山の脇を抜ける道筋が比較的楽な道のりになるからである。一宮川本流の川沿いも，平坦な道のりと言えるが，その上流で高星山の絶壁に遭遇するので，豊田川の流域に劣る道のりと言える。近世においては，一宮川の川沿いは，主に茂原から長南への道のりとして使われた。

中世末期の房総は，群雄割拠・下克上の戦国時代となっており，南部に里見氏，北部に千葉氏，その両者に挟まれる形で武田氏といった有力氏族がせめぎ合い，さらにそれぞれの中で内紛を繰り返すという有

第2図　真名城周辺遺跡分布図

り様であった。そのため，城館砦は枚挙にいとまがないほどであり，真名城を含むその周辺も例外ではない。

特に真名城の位置する場所は，二宮庄・藻原庄等の水稲生産地，房総東浜往還の交通網，千葉氏と武田氏と言う両勢力の境界線上として，その重要性に注目する必要がある[4]。

1．真名城　2．真名宿谷城　3．小林城　4．殿谷城　5．鷲巣山城　6．斉藤館跡　7．鞘戸城　8．黒戸堀之内館跡　9．榎本城（要害城）　10．今泉城　11．榎本城　12．狸谷砦跡　13．上人塚　14．塚　15．宿横穴　16．宿谷横穴　17．押日横穴　18．下谷横穴　19．国府関横穴　20．庄吉谷横穴　21．真名横穴　22．野本横穴　23．船戸横穴　24．八田横穴　25．内谷横穴　26．打越横穴　27．河内横穴　28．大笹横穴　29．山崎横穴　30．長谷横穴　31．箕輪大谷横穴　32．箕輪横穴　33．榎本・垣ヶ谷横穴　34．榎本・和合横穴

3．史料にみる真名城（第4図）

「真名城」が，史料上に現れることはほとんど無い。わずかに長柄町中野台の川嶋家に伝わる『上総国長柄郡真名城主由来記』にその名が認められる程度である。

この『上総国長柄郡真名城主由来記』（以下『由来記』）は，大正4年に長柄町内来地の医師内田邦彦氏が著した『南総の俚俗』[5]に「(附録)」として掲載されたものであり，近江佐々木氏の一族である三上長重が城主であったと伝えている。この史料について，永井義憲氏は『長柄町史』[6]において，「おそらく近世初頭，後の村の明細帳とよばれるものに類似した書類の提出を求められた際に，古城の由来書を報告した控書のような物ではないかと推測される。」とし，ここに出てくる真里谷武田氏による三上氏の拠城である真名城への攻撃のような「小合戦のあった事実は認むべきであろう。」としている。また，城主「三上」という点から小高春雄氏は，茂原市の藻原寺に残る『仏堂伽藍記』『快元僧都記』に見られる〝三上城〟をこの真名城に当てている[7]。

しかしこの『由来記』については，疑うべき点も多々あるので，そのまま信じるには，躊躇せざるを得ない。内田邦彦氏もその注釈において，誤字や脱字，不詳の文字があることを述べている。以下に全文を引用し，改めて『由来記』について考えてみたい。

『上総国長柄郡真名城主由来記』

そもそも当城主は，宇多天皇の20代目で近江の太守佐々木判官代源朝臣満経脚の3代目佐々木三上右清源長重入道寂定と号した。

そのころの関東公方は持氏と号したが上杉のために殺された。この息子の成氏は幼くして鎌倉を離れ信州諏訪に身を隠していたが，成長して関東に対して旗揚げをした。三上右衛門佐は，その当初から味方するために江州を立ち，武田・村上・堀江・宇津・丸谷といった人々と力を合わせ鎌倉に攻め下った。上杉を追い払い再度成氏公を鎌倉に御据えした。しばらくして，再び上杉が鎌倉に向かった。この時成氏公は，上州の古河城へ移られ，堀江・村上・武田・三上・宇津・丸谷の人々は，治めていた上総国へ逃れ長南・長北・真名・久留里・金谷・丸谷の城々へ立てこもった。成氏公が御亡くなりになってからは，小弓義明と心を合わせ年月を送っていた。しかし，宇津左京が心変わりして真名の近くまで攻め入

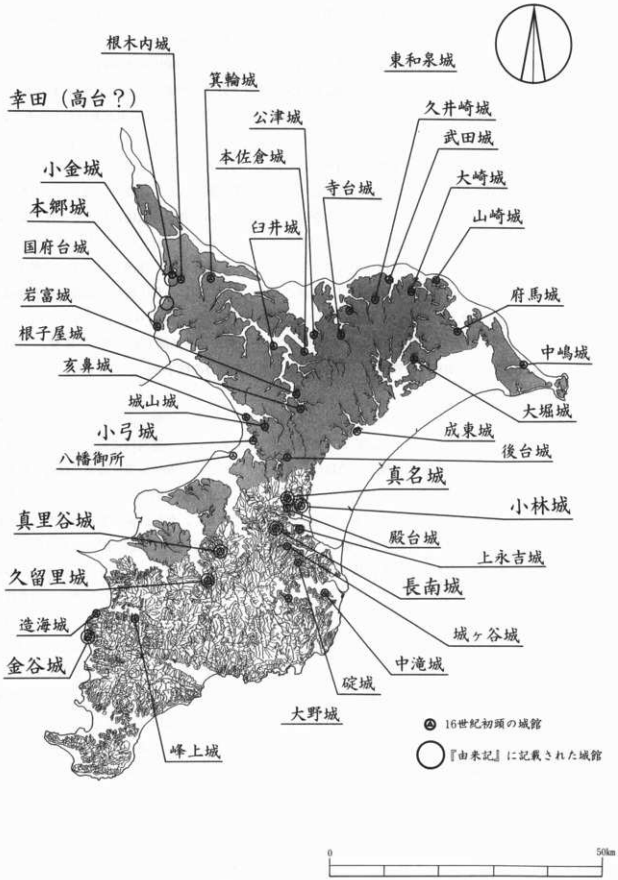
第3図　真名城周辺迅速図

ってきた。これを聞いて，嫡子三上出雲守重政の次男三上源六郎重家を大将として，三立・中村・田中・入江ら精鋭を多数小林城に配置して，真名城の守りを固めた。その間にかねてからの約定である千葉・高木の加勢を待っていたところ同じ国の住人丸谷怒関が，真名が不利と見るや心変わりして，弘治元年三月十七日夜北条氏康の下知と偽って真名城に攻め込んできた。真名城に居た川嶋大学の一族三十余騎が立ち向かったが，一人残らず討ち死にした。身内やその他の人々だけでは，城を守るのも難しく，とても勝てるような状況ではなかった。そこで同十八日全員そろって勝武庵安要寺に降りていって団誉上人によって引導を受け主従三十七騎が自害した。この有り様は，小林城にも伝わり出雲守重政は，三立権九郎を呼び寄せ真名城が落城したからには，父の孝養のためにも早急に一合戦挑むことを述べたが，家老たちは，長重自害を聞くと勢いをなくし逃げていく者が出てきたので，一戦するのも難しくなった。そこで，この城を出て小金城に移り高木殿にご相談すべきと諫言され，重政は力およばずに十八日夜小林城を出立つして，小金城に着くとこれまでの事情を説明した。話を聞いた祖父高木下総守・伯父の高木五郎左衛門尉は，北条氏康の意向を聞くことにした。そこで使者を立て，三上右衛門のことで北条殿が下知を下したために丸谷怒関が，十八日に攻め込んできて右衛門は自害し，嫡子出雲守とその次男源六郎は小林城にいたがあまりの劣勢に戦うことも出来ないので，その領地を離れて小金城に来ていることを伝えた。するとこの話を聞いた氏康公は，丸谷が，私の下知では無しに行なったことである，未だに上総国は，私が治める土地ではないと答え。三上出雲守は，高台の南側川筑の七ヵ村を治め，軍事行動については，高木氏と共に行動し下総国本江城に住む事になった。三上源六郎は，成長してから岩筑城主の北条十郎殿の配下になり岩筑先の合戦で討ち死にした。

以上がおおよその内容であるが，これを伝えた川嶋家は，もともと真名城と谷一つ隔てた中野台と呼ばれる台地上で栄えた名主であった。当主には代々口頭で，真名城落城の折，中野台に家臣花井三九郎とともに落ち延びてきた川島大学の遺児が，自分たちの先祖であると伝えられていたらしい。川嶋家の裏山に塚があり[8]ここからかつて馬の骨が多数検出されたとのことで，真名城落城に関わりがあるかもしれない。

『由来記』に登場する人名については，若干の違いはあるが，中世末期の房総に関わった人々である。北条十郎は，北条氏政の四男で天正11（1583）年から武州岩付（槻）城の城主となった北条十郎氏房であり，丸谷怒関は真里谷如鑑であろう。しかし，小高氏が述べているように，真里谷如鑑こと武田信清は，天文３（1533）年に没しており，弘治年間の真里谷城主は，武田信應であり，弘治元（1555）年の秋には，北条氏康が安房金谷に攻め込んでいる。このころの真里谷武田氏は，内紛を繰り返し，里見氏の半ば配下となっていた。このような真里谷氏が，真名城に攻め込むことは難しい。さらに鎌倉公方足利持氏が没したのが永享11（1439）年，その子古河公方足利成氏が没したのが（1497）年，小弓公方足利義明の没したのが天文７（1538）年である。真名城落城＝三上長重自害の年は，持氏の死去から116年，宝徳元（1449）年成氏の鎌倉入りからでも106年，康正元（1455）年成氏の古河敗走からで100年という期間が過ぎている。『由来記』の記載内容にはいささか誤りがあると言わざるを得ない。

三上氏について藻原寺の『仏堂伽藍記』には，「永正14（1517）年に三上と真里谷の間で取り合いがあり，この真里谷に早雲衆と呼ばれる一団が関わっていた（以下欠失）」ことが記されている[9]。ここに出てくる真里谷とは，上総国畔蒜郡畔蒜（木更津市真里谷字真地）に本拠地真里谷城を有する武田氏（真里谷武田氏）のことであり，早雲衆とは，相模国箱根山の麓に本拠地小田原城を有する北条氏（後北条氏）のこと



第４図　16世紀初頭主要城館分布図

を指している。

『快元僧都記』においては，「上総国の武田真里谷三河入道と同じく上総国の小弓城城主原二郎とが争っており，いつも小弓の原二郎が勝っていた。自力では勝てないと悟った武田氏は，奥州の義明を大将に招き，ついに永正14（1517）年10月15日に小弓城を陥落し，原二郎と，その家臣の高城越前守父子を滅亡させた。なおその2日前の10月13日には三上城を陥落，原氏の家臣下野守は逐電している。」と記されている[10]。

この2つの史料において共通する，永正14年に真里谷武田氏と三上氏との間に抗争があったという点は，まず間違いなかろう。したがって，三上氏は，この戦いの後に小弓に入った足利義明の小弓殿に関わったのではなく千葉介満胤の庶子で応永年間（1394～1428年）に小弓に入った原四郎胤高の一族に組みしていたことになる。原氏は，康正元（1455）年に馬加氏と組んで千葉一族で内乱を起こし，宗家の座を奪いその勢力を増大させていた一族である。下総へ勢力を伸ばそうとしていた真里谷武田氏にとっては，最大の敵であった。この両者の戦いは，当然下総と上総の国境に近いところで行われていたことであろう。

『仏堂伽藍記』は，茂原市茂原の藻原寺が所蔵する文書である。藻原寺は，建治2（1276）年創建と伝えられる常在山妙光寺をその基とする，日蓮宗の名刹である。近世初頭に事務手続きの問題から寺院の名称を藻原寺と改めたと伝えられるが，東上総を代表する寺院であることに間違いはない。『仏堂伽藍記』は，永正13（1516）年（？）の書写と考えられ，もとは冊子だったもののうち断簡6紙が残る。嘉歴2（1327）年から永正14（1517）年にかけて，妙光寺（藻原寺）及び長生郡地方の様子を記しているが，一部続かない部分もある。

『快元僧都記』は，天文元（1532）年から同11（1542）年にかけての北条氏綱による鶴岡八幡宮再建の様子を記した，快元の日記である。快元は，鶴岡八幡宮寺供僧職にあり，社寺運営特に天文の大造営に深く係わった人物である。そもそも鶴岡八幡宮の再建は，大永6（1526）年に安房の里見義堯が鎌倉に乱入した際の兵火によって炎上したものの復旧であるが，それは同時に坂東に覇を唱えるものとしての意思表示でもあった。したがって快元の日記の内容も，再建の様子だけではなく，北条氏綱の軍事行動や，当時後北条氏が積極的に取り組んでいた房総経営の様子についても細かく記されている。先の事件は，天文六（1537）年丁酉の12月の記載の後に書かれており，後で覚書きとして書かれたもののようである。これは，この年の5月に上総の真里谷武田氏に内乱が起こり，これに小弓公方足利義明が係わっていたためにその素性を書き記したものであろう。

以上のことから，真名城の築造年代については明確にできないが，その終焉は永正14（1532）年であり，その後は真里谷武田氏や，小弓公方によって使われることなく打ち捨てられていったものと考えられる。それは，先の『由来記』にその後の真名城のことが全く触れられていないことからだけではなく，真名城周辺に推定された二宮荘が，その後，後北条氏の領するところとなり，永正16（1534）年北条早雲が箱根神社の菊壽丸（早雲の五男）へ「かづさのくに二ミや」から「千くわん文」を寄進していること[11]，永禄6（1563）年藻原寺に領主として真里谷武田氏が仁王像を寄進している[12]ことなどからも窺うことができる。

注

1）関東ローム研究グループ　1965　『関東ローム』（築地書店）の付図Ⅲ「関東ローム地質図」を基に作成した。

2）竹内理三　編　1984　『角川日本地名大辞典　12　千葉県』　角川書店

3）長柄町史編纂委員会　編　1977　『長柄町史』

4）註3に同じ

5）内田邦男　1918　『南総の俚俗』

6）註3に同じ。なお，今回の調査において，長柄町在住の大妻女子大学名誉教授永井義憲氏の御紹介により，長柄町前町長川鶴美意氏から所蔵の『真名城城主由来記』現物を拝見することができた（図版11）。

7）小高春雄　1991　『長生の城』　自費出版　なお小高氏からは，今回の調査で多くの教示を受けた。

8）第2図の14がこれに当たる。

9）千葉県史編纂審議会　編　1962　『千葉県史料　中世篇　諸家文書』　図版10の一。

10）財団法人　神道大系編纂会　篇　1979　『神道大系　神社編20　鶴岡』

11）市原市教育委員会　1980　『市原市史資料集（中世編）』

12）註9に同じ。図版10の二。

II　城の構造

今回の調査は，地形測量と現地の観察による真名城の構造・規模等の把握と，周辺における資料収集による真名城の歴史的性格の解明を目的として行われた。

地形測量は測量業者に委託し，併せて現況観察を行って真名城の構造等を推定し，それらを基に真名城の概念図を作成した。

この作業において，真名城は当初予想していたよりも広範囲にわたって自然地形の改変を行った，複雑な構造をもつ大規模な城郭であることが判明した。

1．周辺の小字（第5図）

真名城とその周辺には，当時の様子を想起させる字名が認められる。小詰・北門などは城の構造を，元宿は城下の様子をそのまま表していると考えられる。ただ御館谷は，オンヤカタタニではなくミタテヤツと読むことから，当時の城主の居館との関連のほか，先の『由来記』に出てきた家臣の三立氏に関係する可能性も考えられる。これは，『由来記』を残した川嶋氏と，川嶋谷の存在からも十分に考えられることである。家臣の名を冠した谷の字名や宿場の存在を想起させる元宿の字等，これらの谷には中世の屋敷等の存在が予想される。

さらにここで問題になるのは，真名城と谷を隔てた北側に位置する南北に細長い丘陵の周辺に見られる古屋敷や堀之内[1]・宿谷・宿前・向宿などの小字名である。こちらも同じように谷に冠した字名であり，現在水田や畑地となっている部分に中世の遺構の存在が予想される。そして真名城西側の宿が「元」であることから，こちらに真名城周辺における生活圏の中心があった可能性が考えられる。

2．真名城の全体（付図2）

本城跡は，大堀切によって丘陵から切り放した部分を北限にして，独立した丘陵のほぼ全体に加工を施した南北約1,200m，東西約600mのかなり大規模な範囲に縄張りが展開している。この縄張り内には，3か所のメインとなる突出した平坦地が設けられている。これらを便宜上「郭」として，北からⅠ郭・Ⅱ郭・Ⅲ郭とする。この郭と大堀切の計4か所の間に，それぞれを繋ぐように広い曲輪，さらにそれぞれの斜面に谷底を見下ろすように多数の腰曲輪が配置されている。メインの郭から派生する痩せ尾根には，至る所に堀切りがみられる。

腰曲輪は，大小様々なものが至る所に配置されている。そこで本城跡の構造を大堀切周辺・Ⅰ郭周辺・Ⅱ郭周辺・Ⅲ郭周辺に分けて説明していく。

3．大堀切周辺（第6図）

大堀切の南岸にやや狭い曲輪5か所が認められ，ここを最高所として，そこからⅠ郭との間に比較的広い曲輪4か所とやや狭い曲輪10か所，短い土塁1か所とで構成されている。このほかに大堀切の外側，北と南にそれぞれ6か所の曲輪が認められる。

第5図　真名城周辺の小字

大堀切は，最高所と最低地の間が，約7mを計測するもので，北東方向の字中西側からの進入を防ぐように構築されている。この大堀切の掘削によって生じた排土は，北側の斜面に積まれ，堀の深さを増している。大堀切南岸上の曲輪は，階段状に連結している。Ⅰ郭との間の曲輪は，地形に沿って，広い曲輪が東に向かって段を成している。この中ほどに尾根の削り残しと思われる狭い曲輪が，一段高くなった台状をなしている。土塁も，同様な削り残し的な状態で西側斜面に対して認められる。

大堀切東側の狭い曲輪と，それとの間に土塁状の境を有する広い曲輪とは，その土塁状の境に設けられた堀切状の通路によってつながっている。

大堀切西側は，傾斜の急な斜面になっており，その下にやや広い曲輪が認められる。

4．Ⅰ郭周辺（第7図）

Ⅰ郭は，十文字形を呈した高まりの頂上にやや狭い平坦地を有している。この郭を中心にして，周囲に広い曲輪5か所と狭い曲輪10か所，さらにここから派生する尾根の周囲にもいくつかの曲輪が配されている。また，Ⅰ郭北東の所に虎口状の施設が認められる。

Ⅰ郭北東の虎口状の施設は，北と南に高い曲輪を配し，東側にはそれらよりもやや低いながら高い曲輪を有し三方を囲まれた窪みで，その北東方向に通路状の部分が認められる。しかしこの通路状の部分もその先で一段下がって斜面に落ち込んでいく。これらの構造から，南北の曲輪を横矢として敵の侵入を防ぎ，たとえ通路部分に入り込まれても，反対斜面に誘い出す工夫が施されていたと考えられる。この通路から，虎口東側の曲輪に入るのが唯一の通路であったのだろう。

Ⅰ郭南側の広い曲輪は，Ⅱ郭との間を急な斜面でさえぎられ，現在は，Ⅱ郭との連絡に，土塁を土橋状にした道が使用されている。この曲輪は，Ⅰ郭の南側斜面に沿って東へ向かうと，緩やかな凸斜面がⅠ郭頂上の平坦面に，同じく緩やかな凹斜面が先の虎口東側の曲輪に続いている。

Ⅰ郭から南西に伸びる尾根は，腰曲輪や，切岸によって急な斜面となっている。北西に伸びる斜面には，やや広い曲輪らしき物がいくつか配されている。

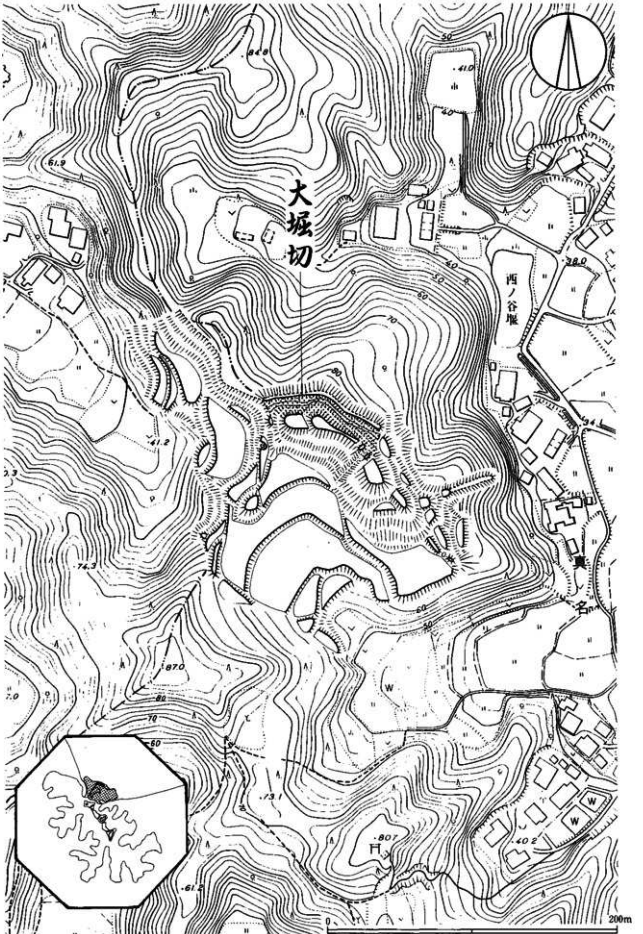
5．Ⅱ郭周辺（第8図）

Ⅱ郭は，矩形に整えられた高まりに，L字状の広い平坦面を有している。この平坦面を廻るように狭い曲輪が，階段状に続いている（本城の主郭か）。この郭の南北に広い曲輪が3か所あり，それらを囲んで，斜面に腰曲輪が多数めぐっている。また，Ⅱ郭から派生する尾根にも腰曲輪や切岸[2]が認められる。

Ⅱ郭の広い平坦面は，その北側が窪み，全体として北側に曲がるL字状を呈する。この窪みも虎口と考えられる。この平坦面を廻るように続いている狭い曲輪は，この虎口に向かう通路であったのではなかろうか。

Ⅱ郭北側に配された2か所の広い曲輪は，大堀切周辺と同様に東に向かって段を成している。この曲輪北側に壇状の狭い曲輪2段が認められる。これはⅠ郭南の広い曲輪との間のさまたげとなり，さらに西に対する土塁的な働きをなしている。

Ⅱ郭南側の広い曲輪は，本城跡において最も広い平坦面であり，この場所を中心として，「小詰」の小字が呼び慣らわされている（以後ここでは仮に「小詰曲輪」と呼称する）。この「小詰曲輪」の南西には，やや短い土塁が配され，東西は，非常に急な斜面となって腰曲輪へと続いている。



第6図　真名城大堀切周辺概念図

「小詰曲輪」とⅡ郭の間から下の谷へ降りる道が現在使用されている。この下の谷が「北門」と呼び慣らわされてきた小字であることから考えて，この道が本城跡に通じる登坂道（大手口か）であったと言えよう。この登坂道に対して「小詰曲輪」の北辺の一部が窪んでいるのは横矢の働きをなすものであろう。この登坂道に沿う形で，「小詰曲輪」の東に腰曲輪が数か所配されている。

「小詰曲輪」の西側には，突出する尾根を切って細長い腰曲輪２か所が段を有しながら「く」の字状になるように配されている。この腰曲輪の西側に一段下がった所に，同じように「く」の字状を呈する細長い腰曲輪が配されている。これらによって，西側の谷（小字「来地谷」「内来地」）から「小詰曲輪」へ至るには，都合２段の非常に急な傾斜面と遭遇することになる。

Ⅱ郭から南西へ派生する尾根は，東側の随所に腰曲輪が配され，西側は切岸となっている。

６．Ⅲ郭周辺（第９図）

Ⅲ郭は，三角形に整えられた高まりで，そのうち二角に一段高い曲輪が配されている。この郭を囲むように腰曲輪が廻り，北・東・南に向かって細い尾根が派生している。このうち東と南の尾根には，かなり大きな堀切が施されている。

Ⅲ郭は，Ⅱ郭の「小詰曲輪」との間を壁状の急傾斜によって画された高まりで，東に向かって広い底辺をもつ二等辺三角形状の平場を成している。このうち南側の先端部が一段高くなった曲輪で，「物見」的な役割が想起される。北側の高まりは，南北に細長いことから，土塁の可能性がある。北東側の先端には，Ⅲ郭から「小詰曲輪」に対して一段低い曲輪が存在しており，Ⅱ郭あるいは，「小詰曲輪」からの通路的な意味をもっている。

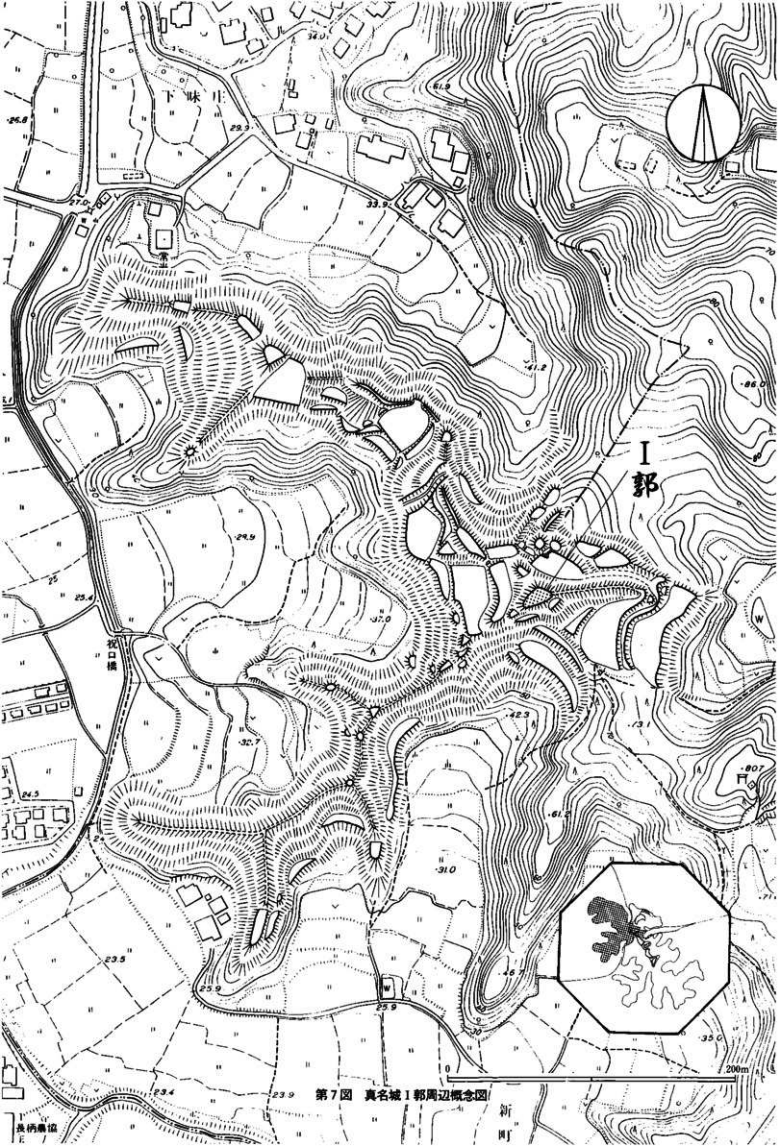
Ⅲ郭を廻る腰曲輪は，東と南の斜面に２～３段にわたって配されている。東と南の曲輪の間には，東に向かって尾根が伸びているが，この付け根の部分に堀切が施されている。この堀切の下場は，東・南両腰曲輪の上段のものとほぼ同じ高さであり，両者をつなぐ通路的機能も考えられる。同じような堀切は，北に向かって伸びる二本の尾根のうち東側のものの付け根においても認められる。

北に向かって伸びる尾根のうち，西側のものはⅡ郭から急な傾斜で落ちたところに二段の曲輪を配している。北に伸びる二本の尾根の間にも腰曲輪が認められるが，こちらの腰曲輪は，東・南のものに比べて低い位置に配されている。

東に向かって伸びる尾根は，先の堀切から始まって，その北側には随所に腰曲輪を配し，御館谷と内来地の間に深さ約５ｍの堀切が施されている。この堀切から東に向かうと尾根は南北に分かれ，その分岐点がやや高くなって，ここに長方形の曲輪が配されている。ここから南に向かって伸びる尾根は，その東側の随所に腰曲輪を配し，西側は，切岸となっている。長方形の曲輪から北に向かって伸びる尾根は，打越と来地谷との間に深さ約７ｍの堀切が配されている。

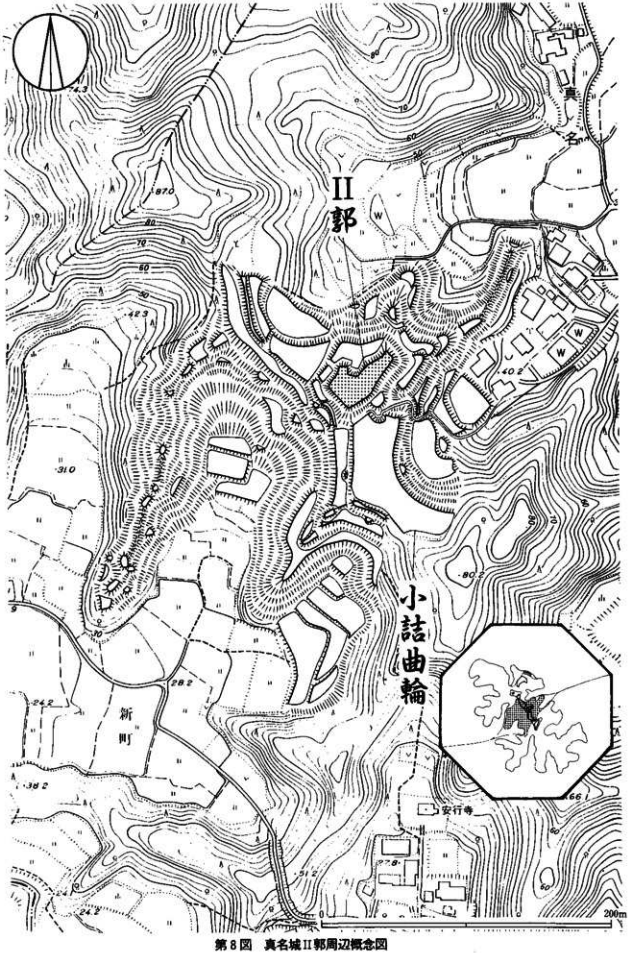
南に向かって伸びる尾根は，その西側の随所に腰曲輪を配し，内来地と元宿との間に深さ約８ｍの堀切が施されている。この堀切から南に向かうと，現在その中ほどで切通しとなり，内来地と水戸を結ぶ道路が走っている。

以上縄張りのうち主な施設を述べてきたが，真名城の多くは雑木に覆われ立ち入ることが困難な場所であったため，すべての施設を確認できたとは言い切れない。特に尾根の先端近くや谷部には，さらに多く

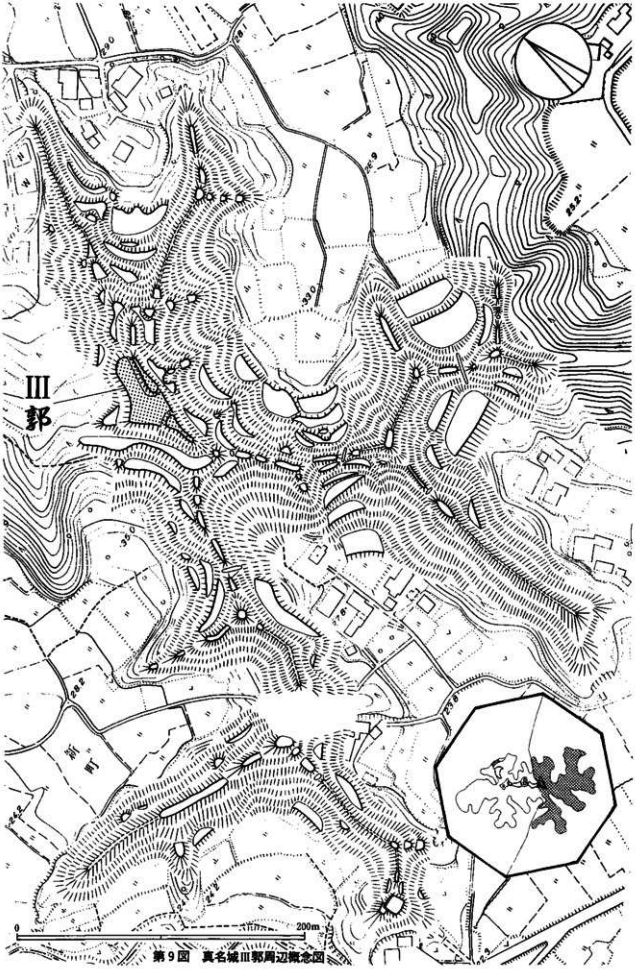


第7図　真名城Ⅰ郭周辺概念図

長柄島協



第8図　真名城II郭周辺概念図



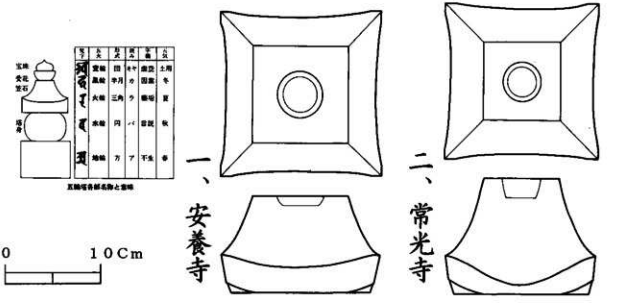
第9図　真名城III郭周辺概念図

の施設が存在している可能性がある。

注

1）現在でも耕地整理を行っており，施工前（1983年）と施工後（1995年）とで様相が異なっている（図版７）。

2）切岸の概念については，「主郭などの曲輪の周りの斜面を人工的に急にして，登りにくくすることを切岸と呼びます。切岸は必ずしも曲輪とセットではなく，攻められそうなところに単独に使われることもありました。」と説明されている。　千田　嘉博・小島道裕・前川要　1993『城館調査ハンドブック』（新人物往来社）



第10図　周辺検出遺物

Ⅲ　周辺の中世的景観

真名城南側の谷，内来地には，現在は西新町集会所となっているが，もとは安養寺という寺院が存在していた。集会所の脇は，整地されているが今でも墓地であり，その片隅に２段の墓石が据えられていた。この墓石のうち下段は，細工が施された近世以降の物であるが，その上段は，面取り以外何の加工も加えられていない中世の五輪塔の一部，火輪部である（第11図１・図版６の一）[1]。先の『由来記』に出てきた安要寺とは，この寺院を指すものと思われる。

真名城北西の尾根上には，常光寺と呼ばれる寺院が存在している。この寺院の軒下にも中世の五輪塔の一部，火輪部が転がっていた（第11図２・図版６の二）[2]。

真名城の谷を隔てた北東側の尾根には，真名宿谷城が認められる（第13図・図版７の一）。真名城と同じ丘陵から南に伸びる尾根をその根本の部分で大堀切によって画し，その南側に各種の曲輪を配している。本城周辺の字に宿の名がいくつか認められる。真名城周辺の字「元宿」に対して，こちらが「新宿」と考えられるのではないか。小高氏もその構造からこちらの城跡が，真名城に比べて新しいものと判断している[3]。

真名城の南，豊田川を隔てて約1,700mほどの尾根上に殿谷城跡が認められる（第12図・図版７の二）。現在，如意輪寺が建っている谷を囲むように曲輪が配されている。

真名城の東約３km，長生丘陵の東端に当たる尾根上に小林城が認められる（第14図・図版７の三）。西から南東に伸びる尾根の高所に広い平坦地が認められ，ここを郭としてそこから派生する尾根上の平坦地に曲輪，その回りに腰曲輪・切岸・堀切等を配する構造を呈している。九十九里平野から豊田川を遡る茂原街道の長生丘陵への入口に当たるこの地に立地することからも，ここが，先の『由来記』に記載されている「小林城」に相当するといえよう。

この小林城から南に約2.5kmの所に藻原寺が位置する[4]。ここは，鎌倉時代には館で，その後，日蓮宗創生期において妙光寺と呼ばれた古刹である。先の『仏堂伽藍記』や『仁王堂棟札』にみるように，この寺院を中心として茂原は，上総国の太平洋における文化・経済の一中心地となっていた。

注

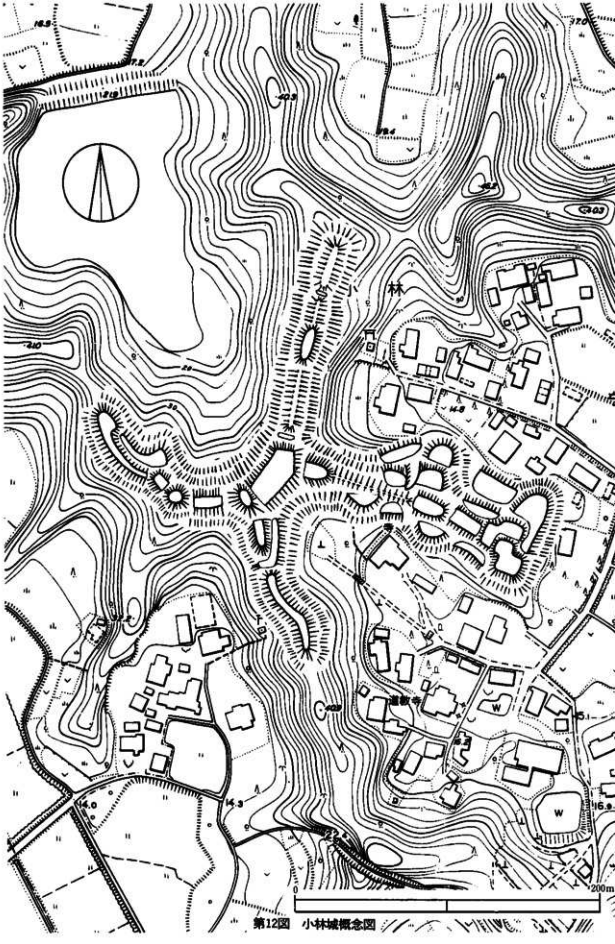
1）小高氏によると，昭和58年ころにはこのほかに５～６個の五輪等の部品が散在していたらしい。

2）第14図の五輪塔説明図は，井上光貞監修　1979『図説歴史散歩事典』（山川出版社）を参考にした。

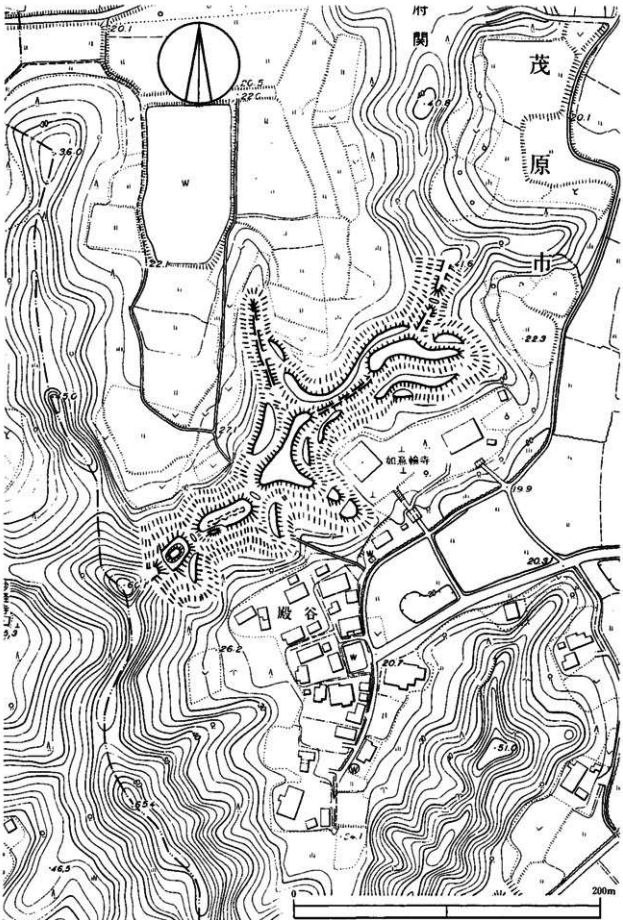
3）小高春雄　1991『長生の城』。なお，第12～14図の概念図は，同書を基にして作成した。

4）第２図６の斉藤館跡がこれに当たる。斉藤氏の館跡が妙光寺に変わり，さらに藻原寺になった経緯については，茂原市史編さん委員会編　1966『茂原市史』に詳しく記されている。

第11図　真名宿谷城概念図



第12図　小林城概念図

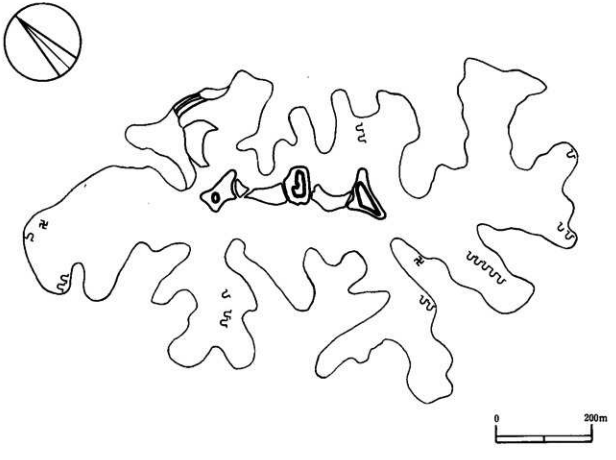


第13図　殿谷城概念図

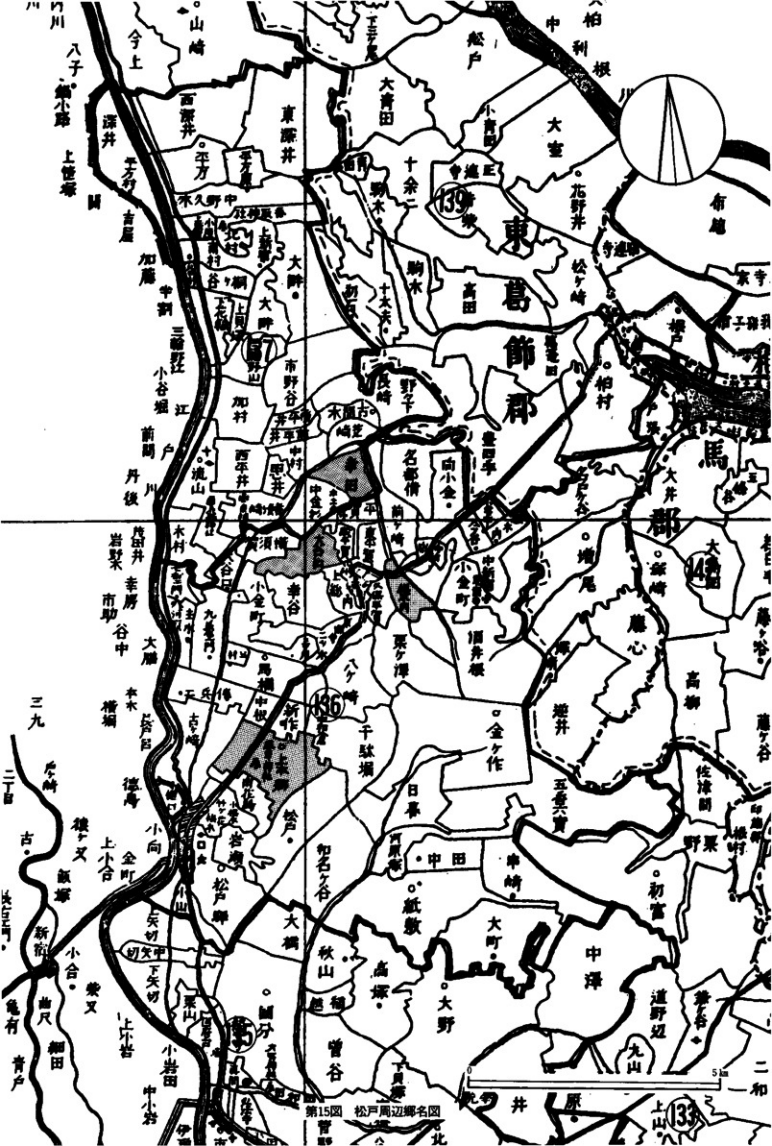
Ⅳ　まとめ

今回の調査に当たり，その歴史的側面は『由来記』の記述に負うところが大であった。この内容が資料としてどれほど信頼性があるかについては疑問があるが，これを今に伝える川島氏の話には，興味深い点が多々ある。その中で，落城時の脱出方法として，横穴墓の中に隠れたとの話があった。この地域の横穴墓は，高壇式と呼ばれる独特な形態を有し[1]，入口からその奥まで見通すことはできない構造を呈している[1]。本城跡周辺には長柄横穴墓群を初めとして，多数の横穴墓群が確認されている。さらに今回の調査によって，本城の範囲内においても多数の横穴墓が確認できた(第16図)。現在，その入口は土砂の堆積によってほとんどが埋まっており，わずかにその一部が確認できるのみであることから考えても，長年この城の周辺に住んでいた者ならともかく，よその土地から攻め込んできた者には，分かりづらいものがある。地域に根ざした伝承と言えるだろう。

本城落城後の城主三上氏のその後であるが，『由来記』を信じれば松戸の高城氏を頼っているらしい。この高城氏についても詳細は不明であるが，もとは千葉氏の一族原氏の傍系であると言われる。建武の争いにおいて，江州の三井寺で討死にした千葉新介胤宗の孫が，その後の南北朝の争いの中で九州肥前国高城



第14図　真名城城域内横穴墓分布図


東葛飾郡
馬郡
柏
利根川
中川
八ヶ崎
今上
深井
上笹塚
西深井
東深井
平方
水久野
中野
北村
加藤
中割
三郷野江
小谷堀
前間
丹後
大畔
市野谷
加村
西平井
明井
流山
木村
岩野木
市野谷
大屋
谷中
小金
小金町
九蓮寺
馬橋
中根
古ヶ崎
新作
三九
二十日
徳蔵
小向
上小合
金町
矢切
切矢
新宿
小合
柴又
亀有
青戸
小岩田
中小岩
栗山
国分
曽谷
大橋
秋山
高塚
大野
紙敷
中田
日暮
松戸
松戸駅
和名ヶ谷
千駄堀
八ヶ崎
金ヶ作
五香六実
中峠
大町
中沖
初富
道野辺
九山
上山
二和
原
井
名都借
向小金
前ヶ崎
大井
増尾
鹿心
高柳
藤ヶ谷
佐津間
栗野
柏村
柏
布施
大青田
十余二
駒木
高田
十大夫
長崎
野子
古ヶ崎
木間
大井
大谷口
大金
大橋
大畑
大町
大谷
大金
大金
大金

村に住み，正長元（1428）年に下総国に帰ったことから高城氏を名乗り，後にその子孫が栗ヶ沢に定着したと伝わる。その真偽については問わないとしても，高城氏が，千葉氏の家臣として存在していたことは間違いなさそうである。

高城氏のもとに落ち延びた三上氏は，『由来記』によれば「高台より南，川筑七ヶ郷」「本江城」に住したとされる。明治20年の郷名図分布図（第16図）[2]を見ると，高城氏の本城小金城の存在した大谷口の北東に「幸田」の地が存在している。幸田の読みをコウデイと考えれば，「高台」と標記でき，この地から江戸川（当時の利根川）沿いの低地開発を担当したと考えるのも可能ではないか[3]。さらにこの幸田の地から川沿いに下った本郷の地にも，城跡の存在が確認されている。この本郷の地は，後に里見・小弓（足利義明）連合軍と後北条氏の激戦で有名な国府台と小金城の中間地点に当たり，高城氏を守る最前線的位置を占めていると言える。本郷城が本江城と考えれば，真名城を失った三上氏は，付近の開墾を行う一方，高城氏の本城を守る先兵の役割を果たしたものと解される。

事実高城氏の軍事行動において，「本土寺過去帳」永正18（1521）年の記述に「小弓者共」の名があることから考えても，原氏の小弓城が落城した際に落ち延びた人々が，高城氏の家臣団に組み込まれているのは間違いなかろう[4]。この一覚に，小弓城落城と時をほぼ同じくして落城した真名城の城主以下家臣団が加わっていたとしてもおかしくはない。しかしその後の三上氏は，『由来記』のとおりとすれば，埼玉県岩槻市の岩付城をめぐる争いの中で消えていくことになる。中世後半，戦国時代の幕開けは，三上氏のような中小豪族が一城の主として活躍した時代である。それらの個別的研究が，今後の中世史研究において果たす役割は大きいと考える。

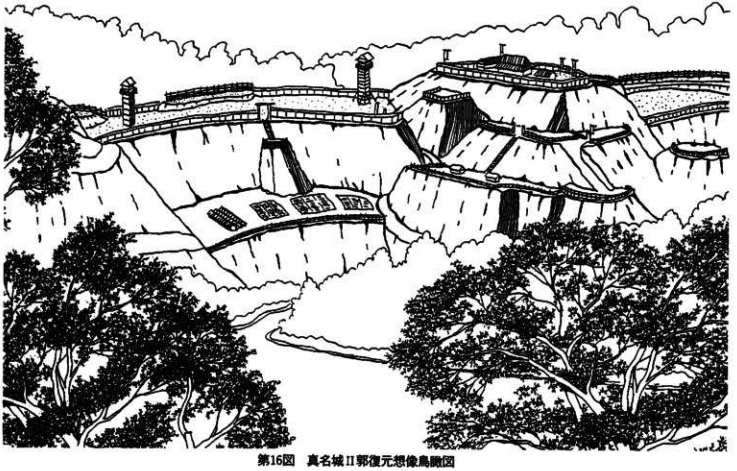
注

1）高壇式横穴は，羨道部と遺体を納める玄室との間に1～2mの高低差を有する形態で，開口部から覗いても段差の壁（羨道奥壁）で行き止まりと見誤り，一目では，玄室の存在に気づきにくい構造である。

2）郷岡良弼　1887　『日本地理志料』による。

3）大谷口の小金城完成は天文6（1537）年であり，弘治元（1554）年には符合するが，永正14（1517）年ではまだ存在していない。このときの高城氏は，根木内の根木内城を居城としていた。

4）松戸市教育委員会　1970　『大谷口』



第16図　真名城II郭復元想像鳥瞰図

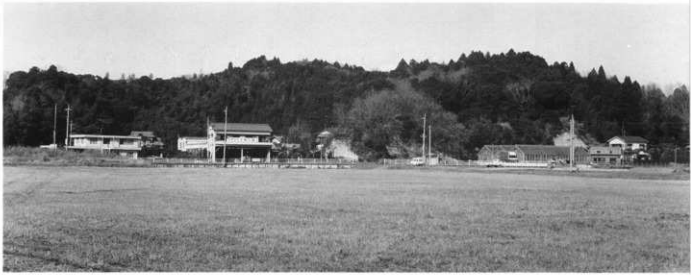
写 真 図 版

真名城周辺航空写真（平成6年）日経コンサルタント株式会社提供

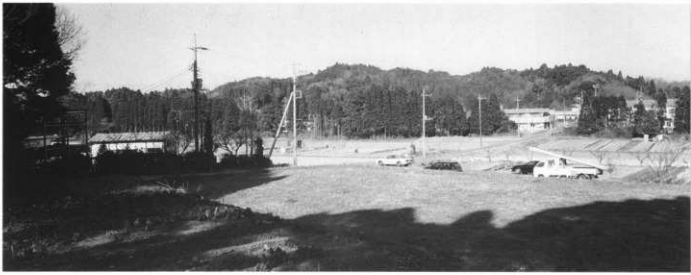
昭和22年の真名城周辺航空写真縮尺約4万分の1　(財)日本地図センター提供

一、北（上人塚）から

二、南東（茂原街道）から



三、南（対岸）から

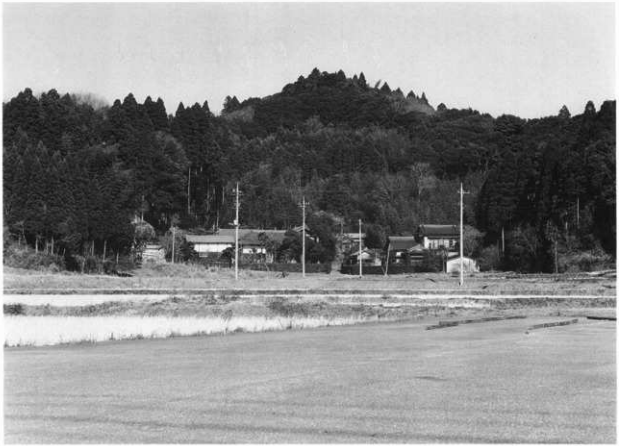


四、西（船木）から

真名城遠景

一、真名宿谷城からII・III郭を望む

二、西新町から来地谷・III郭を望む



真名城主体部

一、小詰曲輪から登坂路を見下ろす

二、小詰曲輪から南へ2段下がった腰曲輪

真名城施設（1）

一　真名谷の遺構

二　安養寺裏の堀切

三　大堀切

四　現名谷集会所付近の堀切

真名城施設（2）

一、昭和58年の堀ノ内・II郭

二、平成7年の堀ノ内・II郭

三、昭和58年の堀ノ内・III郭

四、平成7年の堀ノ内・III郭

字堀之内の今昔

一、安養寺五輪塔

二、常光寺五輪塔

五輪塔

一、真名宿谷城

二、殿谷城

三、小林城

真名城周辺城館

一、薬原寺仏堂伽藍記

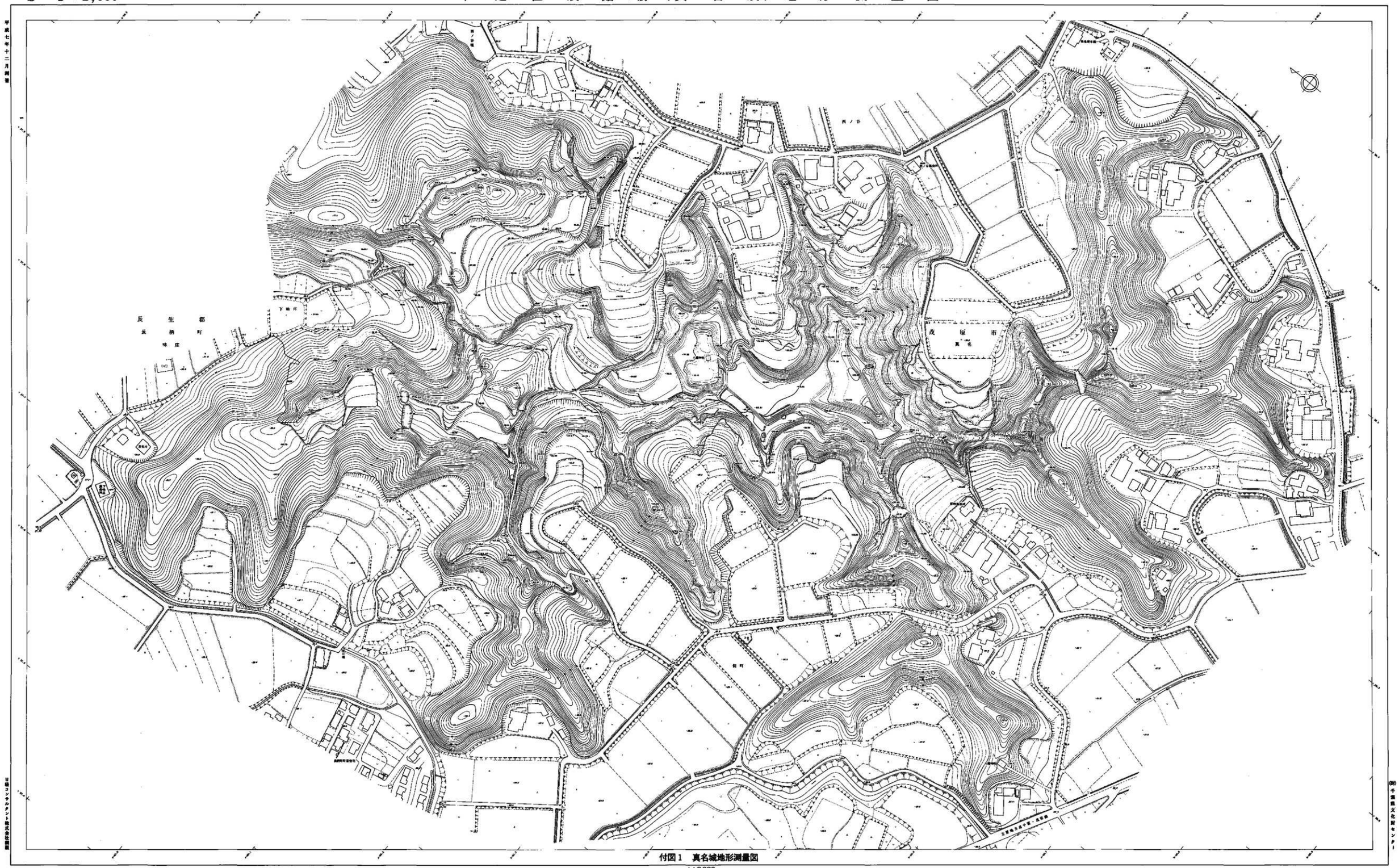
二、薬原寺仁王堂棟札

真名城関連文書

上総国真名城主由来記（川嶋美董氏蔵）

S＝1：2,000

中近世城館跡（真名城）地形測量図



付図１　真名城地形測量図

付図2　真名城概念図

報告書抄録

ふりがな	ちばけんちゅうきんせいじょうせきけんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	千葉県中近世城跡研究調査報告書
副書名	真名城測量調査報告書
巻次	第16集
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第290集
編著者名	豊田秀治
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡803－2　TEL043-422-8811
発行年月日	西暦1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
真名城（まんなじょう）	千葉県茂原市真名字小詰760（ちばけんもばらしまんなあざこづめ） ほか	210		35度27分17秒	140度15分16秒	19951101～19951228	314,000㎡ （測量調査のみ）	国庫補助事業による学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真名城	城郭	中世	郭、土塁、堀切、虎口、腰曲輪	なし	遺存状態の良い16世紀前半の城跡

千葉県文化財センター調査報告第290集
千葉県中近世城跡研究調査報告書　第16集
— 真名城跡測量調査報告 —

平成８年３月29日発行

発　行　　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地２
印　刷　　株式会社　集　賛　舎
千葉市緑区古市場町474—265

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て増刷したものです。